

## 責任もしくは功績に感応する正義 ——行為の責任およびメリトクラシーを問うための基本視座として——

西 口 正 文\*

Justice Corresponding to Responsibility or Desert  
:As a Basic Perspective into Questioning Responsibility for Actions and Meritocracy

Masafumi NISHIGUCHI

### 構成

- 〔序論〕 メリトクラシーはなぜ乗り越えられ難いのか？
- 〔本論Ⅰ〕 〈運の平等主義〉における正義の根本原理と〈責任〉への視角
- 〔本論Ⅱ〕 選択に介在する運への対処
- 〔本論Ⅲ〕 〈責任〉—〈制御〉—〈運〉という三項の相互関係
- 〔本論Ⅳ〕 リチャード・アーヌソンによる、〈あたいすること〉—〈平等〉—〈正義〉の結合方法
- 〔本論Ⅴ〕 人倫の形而上学に位置づく正義と責任 - あたいすること
- 〔結論〕 メリトクラシーを問い、乗り越えるための基本視座

### 〔序論〕 メリトクラシーはなぜ乗り越えられ難いのか？

#### 《ひとの処遇に関する規範をめぐる経営管理的(?) 合理性》

本稿が批判的考察の対象とするメリトクラシーは、ひとの処遇に関する規範として、基本的に受容され通用しているものである。社会的有用性を持つと承認される諸業務に携わる行為者各々が産出する成果の度合いを測定することによって、行為者各々に対する社会的処遇の仕方を決定する、という規範の在り方として、メリトクラシーの概要を述べておくことができるであろう。

この規範においてつねにすでに想定されているのは、予め階層化されて構成されてある社会分業上の各部門ごとに、望ましいと価値づけられる成果のありようが確定されたうえで、それぞれの部門における各行為者による行為遂行の成果度合いが、客観的安定的に測定され得る、という前提である。そうした測定のための尺度（もしくは基準）が、それぞれの部門において“開発”されてある。つまり、メリトクラシーが円滑に機能するためには、その前提として、業務の遂行される状況の多様性や携わる行為者それぞれの生の様態の多様性に左右されずに、一様で安定した——惰性態としての——測定尺度が備わってあることが、必要となる。この前提のもとでは、メリトクラシーがその適用場面に纏わる複雑性に抗して、操作的に効率よく機能することになるだろう。経験的には、この規範に基づいてひとの処遇が、安定性と客観的合理性を帯びた様相を呈して、なされる。すなわち、社会分業上の各部門での業務の遂行をめぐ

\*人間関係学科 教授

る経営管理的合理性が、メリトクラシーに基づくならば達成される、という期待が生じそれが充足されることになる。

この論考で問題化しようとするのは、いま述べたような経営管理的合理性が、ひとの処遇に関する規範を正義の視座から見出そうとするにあたって、受容できることなのか否か、という点だ。この問題化に際して一つの手がかりになるのが、ジョン・ロールズによる「公正としての正義」についての議論の中での、メリトクラシーの取り扱われ方である。ここで特筆されるべきなのは、ロールズによる「公正としての正義」の発想の中に、運の作用と平等とを適切に取り扱おうとする意図が確かに見出されることである。しかしながら、その意図が十分に説得的に論じ尽くされているとは、思えない。

この論考での考察の進め方としては、出来事や行為に纏わる〈責任〉—〈制御〉—〈運〉の相互関係について、〔本論Ⅰ〕・〔本論Ⅱ〕・〔本論Ⅲ〕で考察する。さらに、責任と正義との関係をいかに捉えるべきかについて、〔本論Ⅳ〕・〔本論Ⅴ〕で考察する。それらの考察を通じて、運の平等主義の立場からメリトクラシーを問題化し、そこに帯びる非妥当性を解明するための歩を進めようとする。

#### 《ロールズ流「公正としての正義」の中でのメリトクラシーの扱われ方》

前項での導入的議論から既に、メリトクラシーの最も重要な構成要素のひとつとして、「行為者各々が産出する成果の度合い」に注目する必要性が、察せられるであろう。この要素を本稿では、行為の「結果としての外面的功績」と呼ぶことにする。これに向けてロールズはどのような視線を投じたのか、について言及しておこう。

端的に言うともロールズは、「結果としての外面的功績」という概念が正義の理論をかたちづくるにあたっては無効である、と明言した。この概念を組み立てることになる要素を、ひとの生育史に結び付けて捉えようとするならば、生得的能力という要素および努力する性向という要素が無視され難いことがわかる。しかも各人にとっては、生得的能力の賦与され方という面からも幼少期の生育環境による努力する性向の形成され方という面からも、当人にとって制御することのできない運の作用が強く介入しているのだから、当人に〈あたいる〉と捉えることのできる要素ではない。それら要素の集積態として生じる行為の帰結である「結果としての外面的功績」に応じて各人の処遇を決める、という意味でのメリトクラシーを、正義に悖る、とロールズは説いた〔T.J.Rev.274〕。

上述の側面に留目する限りでは、ロールズはメリトクラシーを徹底して斥けたようにもみなされかねないが、また別の面にも眼を向ける必要がある。思考実験として原初状態から「正義の二原理」を導出しようとする論脈（『正義論』第三章）においては、他者の生のありようには無関心な利己的个人を原理構築に際しての主体とすることによって、考え進めたのだ。真に〈あたいること〉を行為者それぞれに見出してゆこうとする発想は、この論脈では省みられることなく、“暮らし向きで最も不遇なひとの得る基本財を最大化できるように”とする、ロールズ流の分配的正義の原理——格差原理——へと、議論を収束させた。この議論の内実は、社会分業の成果の総体をできるかぎり豊富化することが要求され、それゆえにまた、有能な行為者による生産行為への献身を促すための誘因の備給が要求されもする、というものである。その結果、その度合いにおいて緩和されたメリトクラシーが、生き続けることになる。

### 《人倫の形而上学の取り扱い方》

真に〈あたいすること〉を知り、それに依拠して処遇すること、そのことの困難をふまえながらも、その実現を願う意識もまた、経験世界の中で生じ感じ取られる。ここで意を注ぐべきなのは、ひとの処遇に関する規範をめぐる経営管理的合理性を脱して、〈あたいすること〉の探知に結びつくことが期待される、そのような原理上の根拠を獲得しようと向かい立つためには、経験的世界における事実性自体への省察が求められる、ということだ。そのように省察しようとする意識態勢のもとでは、行為者それぞれにおける〈あたいすること〉を発見するための方途を、経験的世界の事理的合理性の限界を超えて思考すること、そのことの必要性に、いわば論理的必然性を帯びたかたちを以って、気づくことができる。

メリトクラシーを支える規範のもつ性質は、ひとの処遇に関する規範の決定場面に見られるいわば経営管理的合理性であったが、これは正当化契機の根源に位置づけるに相応しい規範の性質ではなく、経験的世界において顕在化しその有効性を主張できる可能性や合理性なのであった。言い換えるところである。すなわち、ここまでの論脈を承けての直観によって、ひとの処遇の在り方を正当化することのできる規範とはどうであるかを、その規範についての正当化契機の根源の方へと問うていくためには、メリトクラシーを乗り越えなければならないことが、感じ取られる。つまり、経験的世界の中にあくまで留まって思考する限り、メリトクラシーを乗り越える方途が見出されないこと、そして、乗り越えるためにはむしろ人倫の形而上学の方へ◆<sup>0)</sup>と思考の向きを変えるように求められること、そのことが予感されるであろう。

上述の予感の妥当することを、この論考の本論で議論することを試みる。その議論の中では、ひとの生への運の作用に敏感でありつつ平等主義的正義を探求する幾人かの論者によって、就中、カスパー・リッパート・ラスムッセンとリチャード・アーンソンによって、提示されてきたところの、〈責任〉と〈平等〉と〈正義〉についての相互関係への洞察が、示唆に富むものとして参照されるであろう。

### 《〈責任〉(→あたいすること)と〈平等〉(≠不平等)と〈正義〉についての相互関係》

ひとにとって〈責任〉は、そのひとの制御し得る事柄の内側での行為について、論じ得ることである。そうであるならば、責任の果たし方におけるそれぞれのひとの相違を以って、それぞれのひとにとって〈あたいすること〉を知ろうと試み得るのではないか、という予想ができる。

責任の果たし方の度合いをもとにして〈あたいすること〉に接近できそうだとする想定は、それを裏返して言うと、〈あたいすること〉とは「結果としての外面的功績」を以って規定できるわけではない事柄だ、と認めるようになることである。すなわち、各人の責任の果たし方の度合いに応じて処遇の〈平等〉(≠不平等)が決められるべきだ、とする規範的認識のもとで、ひとの処遇の上での正当性を得るためには、「結果としての外面的功績」の比較では済まないこともわかる。こうした思考の筋道を経て、ひとの処遇をめぐる〈正義〉を、いくつかの媒介を経ながら、見出すことが図られることになる。

### 《各人にとっての制御域の確定における困難の彼方へ》

各人の責任の果たし方の度合いは各人の制御し得る事柄の内側でのみ、考えられなければならないとしたとき、制御し得る事柄の内側——各人にとっての制御域——を確定する必要性に想い至る。これの確定が難題となる。この難題にいかにして対処するかに関して、本論で摸索を試みる。

## 〔本論Ⅰ〕〈運の平等主義〉における正義の根本原理と〈責任〉への視角

### 《平等／不平等と責任》

平等／不平等と責任の関係について、〈運の平等主義〉においてはどのように把握しようとするのか。この点に関しては、次のカスパー・リッパート-ラスムッセンの提示する二つの命題が啓発に富む◆<sup>1)</sup>。

【命題 1】：あるひとたちがみずから自身の責任にはまったくよることなく他のひとたちに比して暮らし向きが悪い状況にある，という条件下では，その状況はそれ自体，不平等に関して悪しき——道徳的観点から邪悪な——ものである。

【命題 2】：ひとびとの相対的な境遇が彼女らそれぞれの責任の果たし方における相対的な相違以外のなにものかを反映している状況にある，というただそれだけに限定された条件下では，その状況はそれ自体，不平等に関して悪しき——道徳的観点から邪悪な——ものである。

ひとの境遇（暮らし向き）における相違をもたらし要素として正当化され得る唯一の事柄は責任の果たし方の相違である，というのが，何よりもまず，上記の二つの命題が主張していることだ。〈運の平等主義〉における正義の論理に照らして，論理上の純度の高いのは【命題 2】である。これと比べて【命題 1】は，（〈運の平等主義〉における正義の論理に照らして考えた場合の）論理上の純度が低下する。複数のひとたちの境遇が等しい程度であり彼女たちそれぞれの責任の果たし方には相違がある，という状況が道徳的観点からみて善いのか悪いのか，この命題の言明のかぎりでは判然としないからだ。

【命題 1】⇒【命題 2】…………〔記号論理学上の推論形式の真偽を問うところからは，〕偽  
（〔経験世界での日常通俗的意識に迎合して言う，〕真偽の決定不能）

【命題 2】⇒【命題 1】…………真

### 《責任の果たし方の相違を捉える方法は見出されるか》

責任の果たし方における各人の相違をいかにして捉えるかに関しては，〈運の平等主義〉の立場に立とうとする（もしくは，それに近い立場に立とうとする）幾人かの論者によって摸索されてきた。代表的な試みを二つ採り挙げ，ここで簡単に触れておこう。

「資源の平等」という面から平等主義的正義の理説を創ろうとしたロナルド・ドゥオーキン<sup>2)</sup>は，平等主義的分配の在り方を構想するために思考実験として設定された条件下での，行為者による特定資源の選択行為という局面を採り挙げ，帰結の危険性を含み持つ選択肢を選択することや「高価な嗜好」を選択することの責任を当の行為者に負わせるべきだ，と説いた。つまり，（「自然的でむきだしの運」（brute luck）の結果に対比して持ち出されるところの）「選択介在的運」（option luck）の結果は——その後の善き生のありようは——当の選択行為を行なった者の甘受すべき事柄だ，とした〔Dworkin, R. 2000:chap. 2〕。「福祉のための機会の平等」という面から運の平等主義の理説を創ろうとしたリチャード・アーヌソン<sup>3)</sup>は，各人にとっての人生設計を立てるに際して主要な選択局面を想定し，その選択局面での選択肢の備給され方において，選択上の期待価値に格差が生じないようにするための，意思決定樹（decision trees）を考案しようとした。そのことを通して，選択行為の積み重ねの結果として生じることになる，

その後の善き生のありようは、当の選択行為を行なった者の甘受すべき事柄だ、とした。「資源」ではなく「福祉」に、そしてその福祉を実現するための機会に、視軸を向けるという相違があるとはいえ、責任の果たし方の相違を捉える方法という点では、ドゥオーキンと同様に、各人の選択行為を通じての「選択介在的運」が甘受されるべき事柄だ、とした〔Arneson, R.J. 1990〕。

これら二つの試みはしかしながら、リッパート-ラスムッセンが主張するように、責任の果たし方の相違を捉えるための方法としては重大な欠陥を伴っている。選択介在的運の結果には、当の選択を行なった行為者にとって制御し得ず予測し得ない要素が含まれている場合が、多々あるからだ。つまり、運の介入する作用に注目するならば、欠陥を免れるかたちで責任の果たし方の相違を捉えるための方法を探り出すという課題には、大きな困難が伴うのだ。次節では、この点を考察することにしよう。

## 〔本論Ⅱ〕 選択に介在する運への対処

### 《行為者にとってもつ、選択介在的運の帰結の意味》

ドゥオーキンの立論に従うならば、選択という行為に対しては当の行為者の責任が帰せられ、その考え方は「選択介在的運」の帰結にも適用されることになる。したがって、社会正義の観点から矯正されるべき運のもたらす帰結は、選択行為の関与しない「むき出しの運」の帰結に限定されることになる。この思考の道筋は、各人にとっての善き生を選び取る方法をめぐる次のような多様性を念頭に置くならば、受容できるもののように思われるかもしれない。すなわち、行為者たちの中には、安全な生き方を歩み通すよりもむしろ、危険な賭け事の要素を含み持つ選択肢を進んで選び取り、その帰結を自ら引き受け切ろうとする、そのような生き方への構えを採ろうとする者がいる〔……㉗〕。次にはまた、生の過程で賭け事の要素に乗り気になるけれども、その理由がもっぱら、賭け事に関与しない場合の利益と比べて（賭け事から）得られる利益の期待価値が大きいところにある、という行為者たちもいる〔……㉘〕。そして、いま述べた㉗でもなく㉘でもない行為者たちがいる。その中には、賭け事の要素を可能な限り排して最大限に安全な生き方を選び取ろうとする者もまた含まれることになる〔……㉙〕。㉙および㉙においては見出され難い意識のありようとして、㉗においては賭け事に含まれる危険とその帰結を自ら進んで引き受け責任を負おうとする意識が表面化する、という傾向が見られるであろう。言い換えると、客観的な視点からは矯正されてよい帰結だとされても、当事者の意識においては矯正を要しない帰結だとみなされるだろう。

ここでしかし軽視されてならないのは、上記の㉘である。この場合の実際の帰結が期待価値の予想に沿ってもたらされるとは限らないし、運の作用の仕方によっては受容すべき責任が伴うことへの不信をもたらすおそれを排除できない。このことに関する例示を、リッパート-ラスムッセンがおよそ次のような中身を以って表わしている。エリクとフランクがそれぞれ二つの籤に直面していて、エリクにとっての籤とは、確実に100が得られる籤と、50%の確率で150が得られ、25%の確率で90が得られ、25%の確率で50が得られる、そのような籤と、である。フランクにとっての籤とは、確実に100が得られる籤と、50%の確率で150が得られ、50%の確率で90が得られる、そのような籤と、である。両者はともに第二番目の籤を引き、結果として、エリクは150を得てフランクは90を得た。生起し得る幾通りかの帰結とその確率については明瞭であるところのこの設定において、期待価値の大きさとしてはフラン

クの直面した籤の方がエリクのそれよりも有利であり、かつ、エリクとフランクはともに期待価値上の思慮として賢明な選択を行なったが、フランクよりもエリクの方が有利な結果を得た[Lippert-Rasmussen, Kasper 2001:563]。このとき、籤を引かないという選択肢はなかったという設定である。また、リッパート-ラスムッセンは表示していないのだが、籤を購入するに際しては何某かの（100の近傍だと、しかもおそらく100を超えるであろうと、推測される）失費を、両者は負担しなければならなかったであろう。

なお、この場合に100を確実に得られる籤が備給されていることは、生存を保持するための必要条件という点から考えて受容し難い選択肢集合に、エリクとフランクが直面しているわけではなく、その意味での充分性という条件が満たされていることを表わしている。

また、この場合に観察者の視点に限定してみると、エリクとフランクの到りついた帰結はそれぞれの自発的選択によるものなので、その帰結を受容すべき責任が伴う、と考えて済むかもしれない。しかしフランクの主観にとっては、そのような帰結に向けて信頼を込め得る根拠を——受容すべき責任が伴うとする真つ当な意味感覚を——見出し難い、と考えることのできる余地がある。この場合にエリクの選択に比してフランクの選択が、賢明さを欠いているわけでも冒険を敢行しているわけでもないのであるから。この点において、選択介在的運の帰結はすべて選択者の責任に応じた不平等にはかならずゆえに正当なものとして受容されるべきだ、と一概に考えて済ませるわけではないこと、そのことの一端を見て取ることができるであろう。

上記の例示の中での籤とは、各人の生に不可避的に介在する選択肢のことが、しかもその中に、幾通りかの帰結をもたらす運を蔵する選択肢のことが、含意されている、と解釈することが許されるであろう。そもそも、それぞれの生の過程を隔々まで当人が制御し尽くせるわけではないこと、それは明らかである。当人にとって制御できない、生への影響作用のことを、ここであらためて〈運〉と定義しよう。〈運〉とは、各人にとっての環境と与える影響の中で作用しているだけでなく、各人がいわば行為主体として意図的に選び取る行為の中でもまた作用しているのだ。〈運〉がまさにこの論考の核心部にかかわって重大であるのは、ひとの生の過程において継起する行為に向けて当のひとが——当の行為者が——責任を負うこと、そのことが可能なのか、可能だとすればそれはいかにしてか、という問いを喚起するからなのだ。

### 《行為に対する制御と責任》

三つ前の段落で言及した㉗～㉙の中では㉙に（間接的にはあるが）対応すると思われる例示を、というよりもいっそう積極的には、運と責任と制御との関係を考えるためのきっかけとなし得る例示を、アーサー・リプシュテインによる議論を参照することによって、ここで行なっておこう。その議論は、「私」による明確な制御の及び得ないところで生じた出来事によって、「あなた」が軽視し難い害を被った、という事態に対して、どのように責任を捉えるべきなのか、という問いをめぐるものである。より具体的な場面設定はこうである。一方で「あなた」は住宅地の通りを、仕事のことを気にかけて歩いているときに、他方で「私」は屋根の修理をしている。釘の入った箱に手を伸ばした時に、「私」は不注意に——不安定な足場のせいもあって、「私」による十全な制御を欠いて運悪く——、近くに置いてあったハンマーを蹴ってしまった。そうして屋根から蹴り落されたそのハンマーが、「あなた」の頭を直撃した。この事態に向けて、どのような理由づけのもとにだれが責任を負うべきなのか？この問いへの応答としてリプシュテインは、たとえ「私」の明確な制御の及ばぬところで——不運の要素が多かれ少なかれ介在したところで——ハンマーの落下が生じたのであったとしても、「私」への責任

の訴求がなされ得るし、なされるべきでもあるとする。

責任の訴求は、十全で明確な制御のある行為者が為していたかどうか、というところからのみ行なわれるべきなのではない。そうではなくて、むしろ、イマヌエル・カントによる定言命法の定式のひとつとしての「たんなる手段としてではなくてつねに同時に目的として遇されるべき他者」に向けて、換言すれば、つねに平等な関心と尊重を以って配慮の対象とされるべき他者に向けて、実的に払われるべき配慮という規範から、行なわれるべきなのだ[Ripstein, Arthur 1994:6-10]。このようなリプシュテインによる議論は、運の介在によって混迷化しがちな、制御という観念と責任という観念との関係を、解きほぐそうと試みるにあたって、示唆を与えてくれるように思われる。

### 〔本論Ⅲ〕〈責任〉—〈制御〉—〈運〉という三項の相互関係

#### 《十全な制御を妨げる運》

前節の最後にあげた例示からは、ひとの行為に向けての制御の度合いを問おうとする際に、行為自体や行為の帰結に運の作用が介入する点に問題化の焦点を合わせる必要性に、気づくことができる。運の作用の介入を無視できないことは、一般に出来事の生起や帰結という面を対象化する時には比較的に言って意識化されやすいが、ひとの行為や行為の帰結という面を対象化する場合にも、当て嵌まることである。件の例示における「私」が屋根の修理をしようと決意し、その後の修理過程で釘箱に手を伸ばした拍子に意図せずしてハンマーを蹴ってしまった、という事態。この事態を構成する「私」の諸行為には、明らかに運の作用が見出される。

それへの制御の度合いを検討するところの対象となる行為に、運の作用が見出されるということは、対象となる行為に向けての制御が十全ではないということだ。これは、いまここで取り挙げている例示に限られたことではない。なんらかの行為のまとまりを作動させる意識の働きという面からも、身体能力・機能という面からも、行為者本人にとっては制御し尽くせない運の作用が介入してくるということが、一般的に認められるだろう。

#### 《“制御という条件下で成り立つ責任”という見解を超えて》

行為自体や行為の帰結に運の作用が介入するがゆえに、それを制御し尽くせないということは、行為自体や行為の帰結に向けての責任の訴求を諦めなければならないということなのか？この問いに向き合うにあたって示唆を与えてくれるのが、マイケル・ツィムアーマンの所説[Zimmerman, M.J. 1987]であり、さらにそれに依拠して行為をめぐる責任の在り処を探求する福間聡による考察である。

ツィムアーマンの所説においては、運の作用が介入することを通じて行為自体や行為の帰結を制御し尽くせないことを以って、直ちに行為自体や行為の帰結に向けての責任の訴求を諦めなければならないとする意味脈絡が、反省的に問い直される。その問い直しは、運の作用の介入する度合いという点での相違に注目して、ひとの行為をめぐるさまざまな局面でのそのひとの制御できる度合いの相違に敏感となることができ、そのことを通して責任の在り処を問うことができるようになる、というものである。ツィムアーマンは特に、行為の当事者にとって切り離し難い能力や性向などの特徴となる性質をその要素として含む「境遇上の運」と、行為の当事者による意思決定や行為自体や怠慢さから結果として生じる事柄についての「結果として起こる運」とに、大別した上で、後者の運に曝される状況においては制限された度合い

での制御を働かせることができる、と主張する [Zimmerman, M.J. 1987:376-379]。このような主張に依拠して福間は、次のように結論づける。すなわち、道徳上の判断の対象となる諸々の事柄の中で、対象となる諸々の事柄に関与する当事者の「(行ないと帰結) に関してのみ」——行為それ自体と行為の帰結に関してのみ——責任を問いうるのだ、と結論づけている [福間 2001:130-131]。そのような考察の延長線上に福間はさらにまた、リブシュテインの所説を参照しつつ前節で言及したところの、平等な関心と尊重の対象とされるべき他者に払われるべき配慮という規範が、行為の責任を訴求するにあたって依拠すべき規範として重要であることを、論じている [同上 134-136]。

前節と本節でのここまでの行論を承けて、〈責任〉-〈制御〉-〈運〉という三項の相互関係について整理しておこう。その責任の有無や在り処をめぐって道徳上の判断の対象とされる事柄に直面した場合に、その事柄の当事者(たち)の行為のまともに当事者(たち)が十全で明確な制御をはたかせることができたか否かという点にだけ、責任を訴求し得るか否かの判断の準拠点があるわけではない。制限された制御ができるにとどまる場合であっても、そこに介入する運の作用が限定されるのであれば、当事者(たち)の責任を問うことができるし、問うべきでもある。そうすべきことの理由としては、つねに平等な関心と尊重を以って配慮の対象とされるべき他者に向けて払われるべき実的な配慮、という規範のもつ道徳上の重要性が、挙げられなければならない。

#### 〔本論Ⅳ〕リチャード・アーヌソンによる、〈あたいすること〉—〈平等〉—〈正義〉の、 結合方法

##### 《〈あたいすること〉としての功績を測ることの困難》

経験的世界での通用性という観点からは、日常生活上の手段的(道具的)価値を既に持ってしまっている「結果としての外面的功績」によって各人の処遇を決める、という意味でのメリトクラシーは有効だ、と見なされがちである。しかしながら「結果としての外面的功績」には、行為者にとって制御し得ない要素が多分に含まれてある点が、問題化されなければならない、この問題化を処理することなしには、ひとの処遇をめぐる正義に接近することがそもそも為され得ないで済まされることになる。こうした思考を徹底して推進しようとする筋道の途上で、福祉のための機会の平等を唱えることのみでは不充分だと覚識したリチャード・アーヌソンが、新たに提起するようになった理説に、視軸を向けることにしよう。予想されるように、その理説には、〈あたいすること〉としての新たな意味での功績を測ることの困難をいかに克服しようとするかが、問われるはずだ。

〈あたいすること〉としての新たな意味での功績を客観的に確定できるように測るためには、まずは、各人の制御域を確定する必要があるように思われる。ここで早くも大きな壁に突き当たる。そのような確定方法が見つかりそうにないからだ。アーヌソンはその点をわきまえたうえで、なお、あたいすることとしての功績の度合いに接近するために、「誠実さとしてのあたいすること」(deservingness as conscientiousness)を見出す、という方略を提示する。

##### 《「誠実さとしてのあたいすること」とは》

いましがた挙げたところの「誠実さとしてのあたいすること」という方略の概要は、次のようである。それぞれのひとはそれぞれの生の各場面で意思決定しなんらかの行為選択に——取り組みに——携わろうとすること、これを前提とすると、そうした意思決定や行為選択に際し

て、各人にとって善きこと・正しきこととして考えることのできる事柄へのかかわり方（意識の向き）としての内的志向的な誠実さに焦点を合わせて、あたいすることを探り当て認めてゆくこと。

ここに言う内的志向的な誠実さにも、つねにすでに、生得的な制約が、もしくは、社会環境的な制約が、纏わり着くという可能性を無視できないだろう。とはいえ、強固な決定論 hard determinism を採るのでない限り、既に為された選択や決定への反省的な思慮を作用させることはできるのであり、そのような思慮のはたらきの中に誠実さの立ち現われを、観察者は認め知ることができる、というのが、アーヌソンによるこの方略の概要であり◆<sup>2)</sup>、その方略には妥当性を見出すことができる。

ツィムアーマン流に言えば、対象化する意思決定や行為選択のありようについて「境遇上の運」に曝される度合いを極小化するように図りつつ、「結果として起こる運」に集中して視線を投げようとするのが、誠実さとしてのあたいすることという新たな意味での功績を見出そうとする方略なのだ◆<sup>3)</sup>。

## 〔本論Ⅴ〕人倫の形而上学に位置づく、正義とあたいすること-責任

### 《「誠実さとしてのあたいすること」を評価する視点》

それぞれの行為者に見出される〈内的志向的な誠実さ〉としての〈あたいすること〉については、その度合いを、当の行為者にかかわり合うひとたちが果たして適切に評価することができるのか？直ちに投げかけられそうなこの疑問に対しては、慎重で反省的な分別のはたらく思考という意味での熟慮を要する論点であることに留意を促しつつ、次のように暫定的に応答しておこう。社会的協働の在り方についての正しさへの思慮に依拠し、さらにその正しさという基盤の上に想定される、ひとそれぞれの善き生の在り方への思慮に依拠する、という視座が評価に際しての基底をなす。そのような視座は、つねに平等な関心と尊重を以て配慮の対象とされるべき他者に向けて払われるべき実的な配慮、という規範によって統制される。それはまた、そこに介入する運の作用を極小化しようとする視座でなければならない。そのような視座から内的志向的な誠実さのありようを捉えようとする視点は、実的な行為の質に結びつき難いという意味での“表層の主観性”に終わるのでなく、むしろ普遍的妥当性をもち得る内実に向けて、次第に調整されつつ創り出されていくことが、予期される。なぜならば、〔本論Ⅲ〕でツィムアーマンによる立論を参照しつつ論じたことをふまえて考えるならば、対象化される行為に見て取れる内的志向的な誠実さのありようとは、行為者の意図的意味志向的行為の局面として運の介入作用の度合いが可能な限り弱められた様相だ、と判断し得るからである。

つまり、ひと相互の行為とか人-間という間柄を織りなしてゆく取り組みとかに関しては、その行為や取り組みのなされる具象性を帯びた状況的脈絡に規定されつつ、その在り方の善さや正しさをめぐる規範的基準が、それへの運の介在が極小化されて、想定され認知されるのである。ここに謂うところの規範的基準とは、いわば物象化された様態での固定したコードというかたちでは、もしくはマニュアルのかたちでは、表示され得ないだろう。その点が、メリトクラシーに依拠する基準との決定的相違となる。そのような規範的基準による濃密な評価視点の採用へと、向きを採ることが、〈あたいすること〉についての評価を行なうための妥当な方略になる、と考えられる。そしてまた、そのような方略を選び取ることで、ひとの処遇をめぐる正しさの実現という目的に結びつく、と考えられる。

### 《経験世界における規範意識の射程への省察》

行為や人-問の間柄を織りなしてゆく取り組みの在り方をふまえて、各人への処遇の在り方を規範的に選び取る、という場面においても我々は、“人間心理の経験的法則”や“利己的個人の合理的選択法則”に纏わるいわば現実的感觉に、避けがたい様態で縛られる。その形跡が、序論の中で言及した、ロールズによる「公正としての正義」構想の中においても——分配的正義のかたちとして「格差原理」に落着させようとする考え方として、——見出されるのであった。なんらかの規範的提案がなされるとしても、それが現実的感觉を逸脱するとみなされるや、空虚で観念的な議論だとか“絵に描いた餅”だとかの悪罵を浴びせられて葬り去られがちだ。この論考が耳を傾けようとして持ち出したアーヌソンによる「誠実さとしてのあたいすること」に向けても、そのような切り捌き方を以って片づけられることが、おおいに予想される。

翻って考えるに、社会正義やひとの善き生への接近ということを根本原理の水準で探求しようとするにあたっては、経験的“事実”がひとつの思考契機になるわけであるけれども、その“事実”に留まり続けていては当の探求を掘り下げることは不可能だ。本稿が論題としたところの、メリトクラシーという経験世界での処遇原則として覇権を握り続ける原則を、正義の視座から問題化し裁きの方向を見出そうとする場合、運の作用（という経験世界での思考ではもっとも曖昧に放置されがちな面）への敏感な問題意識のもとに、〈あたいすること〉や責任について洞察することは、おろそかにされてよいことではない。その洞察に際しては、ひとたびは形而上学へと標榜する試みも、むげに排斥して済まされるものでもないであろう。

### 【結論】メリトクラシーを問い、乗り越えるための基本視座

以上の行論を通して、行為の責任を問うための理路、および、メリトクラシーの不当性（正義に悖る性質）を証し立てる論拠、これらを示したうえで、ひとの処遇に関する規範の探り求め方を——その第一歩となるであろう理論装置を——、リップパート・ラスムッセン、リプシュテイン、ツィムアーマン、そしてアーヌソンによって導かれるかたちで、示そうと試みた。その試みとは、人倫の形而上学に位置づく、正義とあたいすること・責任との間の妥当な結びつけ方を探り当てようとするひとつの方法の提案であった。

経験世界での処遇原則として覇権を握り続けるメリトクラシーを正当化できないことの理由を、あくまで理論面から論じ尽くそうとする筆者の企図にとっては、本稿での議論は、メリトクラシーの構築される足場の一つを崩そうとする試みに留まる。足場総体の全的解体という到達目標にとっては、一つの通過点にすぎない。運の作用への洞察を深めるところからの、メリトクラシーへの問題化を（ここでの考察をふまえて）いっそう彫琢することが、差し迫った課題として意識される。

### 【註】

- 0) 本論考を構想するに際して、特にその基本的発想上の手がかりとして、カントによる『人倫の形而上学の基礎づけ』中にある次の思考脈絡に負うところが大きい。

いったい人間本性についての知識〔これをわれわれはただ経験からのみ得ることができる〕の中に、道徳の原理を求めてよいのかどうか、と問うことであり、さらに、それがゆるされず、道徳の原理は全くア・

## 責任もしくは功績に感応する正義

ブリオリに、一切の経験的なものからはなれてただ純粹理性概念の中にのみ見出さるべきであって、その他の場所にはそのほんのわずかな部分も見出されえないのであるならば、この道徳原理の研究を、純粹実践哲学または……人倫の形而上学として、むしろ全く他からきりはなし、これをそれだけで十分完備した形に仕上げようとめざすことであり、その際、通俗性を望む公衆をなだめてこの企ての完成する時まで待たせることである。/ そういう全く孤立した「人倫の形而上学」……は、義務についての理論的な確固たる認識のすべてに不可欠な基礎であるのみならず、義務の規則を実際に実現するためのきわめて重要な要求事項である。というのは、義務および一般に道徳法則についての純粹な、経験的刺戟の外からの付け加えを混じえない表象は、人々の心に対し、理性のみを通じて〔理性はこのときはじめて自分が自分だけで実践的でありうることに気付く〕、経験的領域からとり集めうるあらゆる他の動機よりも、はるかにつよい影響力をもつので、理性はみずからの尊厳を意識して経験的動機を軽んじ、次第にそれを支配することができるようになるのである。これにひきかえ、感情や傾向から成る動機と理性概念とから合成されている、混合的な道徳論は、心をさまざまな動機——原理の下に立たず、全く時たまには善に導きうるがまたしばしば悪にも導きうる場所の諸動機——の間に動揺させることになるを得ないのである。[I. Kant, *Grundlegung zur Metaphysik der Sitten* (野田又夫訳) 1785 → 2005:269-271 頁・中央公論新社]

### 1) Lippert-Rasmussen, Kasper 1999: 478-479

なお、本論考においてまず、リッパート・ラスムッセンを採り挙げたのは、運の平等主義に立脚しつつ、〈責任〉と〈平等〉と〈正義〉の関係を原理的に鋭く問おうとした論者だ、と考えられるからである。

### 2) この方略に関してこのように要約された内容を以って捉えることができること、そのことを示すアーンソンによる記述を、挙げておこう。

私のあたいることに関する真相は (score) 一瞬一瞬と、当の時点での私の内なる心的方向性の性質によって、推定される。そしてその真価は、この内なる心的方向性の帯びる性質が私の制御の及ぶ範囲をまったく越えている諸要因か、または、制御するのが困難であったり痛みを伴ったりする諸要因か、によって規定されてくるその度合いによって、継続的に調整されることになる [Arneson, Richard J. 2007:277]。

### 3) アーンソンはまた、副次的な次元で、ひとつひとつの、あるいはひとまとまりの行為の外面的成果としての功績の発揮する手段的価値を無視するわけにはいかない、というように慎重に論じようとしてもいる。その際には、メリトクラシーに陥るのを避けるための注意深さを要求することになるわけだが、アーンソン流の思考のこの局面については、機会を別に設けて主観的に論じる必要があると思われるので、ここでは立ち入らないことにする。

## 【文献】

Arneson, Richard J. 1990 Liberalism, Distributive Subjectivism, and Equal Opportunity for Welfare, in *Philosophy and Public Affairs*, vol.19, no.2

Arneson, Richard J. 2007 Desert and Equality, in Holtung, Nils & Lippert-Rasmussen, Kasper (eds.) *Egalitarianism: New Essays on the Nature and Value of Equality*, Clarendon Press.

Dworkin, Ronald 2000 *Sovereign Virtue: The Theory and Practice of Equality*, Harvard University Press

Kant, Immanuel 1785 *Grundlegung zur Metaphysik der Sitten*

→『人倫の形而上学の基礎づけ』(野田又夫訳) 2005 (『プロレゴメナ 人倫の形而上学の基礎づけ』中央公論新社 所収)

西 口 正 文

- Lippert-Rasmussen, Kasper 1999 Debate: Arneson on Equality of Opportunity for *Welfare*, in *The Journal of Political Philosophy* vol.7, no.4
- Lippert-Rasmussen, Kasper 2001 Egalitarianism, Option Luck, and Responsibility, in *Ethics* vol.111
- Ripstein, Arthur 1994 Equality, Luck, and Responsibility, in *Philosophy and Public Affairs* vol.23, no.1
- Rawls John 1999 *A Theory of Justice (Revised Edition)* Harvard University Press
- Zimmerman, Michael J. 1987 Luck and Moral Responsibility, in *Ethics* vol.97, no.2
- 福間聡 2001「道徳的運に抗して：コントロール条件に基づく道徳的責任の再検討」（『倫理学年報』第50号）